

2023. 1. 8 (日) 使徒6:8~10

6:8 さて、ステパノは恵みと力に満ち、人々の間で大いなる不思議としるしを行っていた。

6:9 ところが、リベルテンと呼ばれる会堂に属する人々、クレネ人、アレクサンドリア人、またキリキヤやアジアから来た人々が立ち上がって、ステパノと議論した。

6:10 しかし、彼が語るときの知恵と御霊に対抗することはできなかった。

<説教>

エルサレムの初代教会では、〈御霊と知恵に満ちた、評判の良い人たち〉七人が新たに選ばれて、〈毎日の配給〉、〈食卓のことに仕える〉務めに任命されました。そして使徒たちはそれまで行っていたそれらの務めから解かれて、〈祈りと、みことばの奉仕に専念〉することになりました。このことを教会の一同がみな喜んで受け入れ、行いました。こうして教会は、〈ギリシア語を使うユダヤ人たち〉(ヘレニスト)と〈ヘブル語を使うユダヤ人たち〉の間で起きた問題と向き合い、乗り越えて行きました(もちろん、それで以後苦情が出るのが全くなくなったというわけでもないと思いますが)。そうやって初代教会は、いわば物心両面において人々に仕える働きをますます担い、〈神のことばはますます広まっていき〉ました。それは、御霊と知恵を教会にお与えになり、そういう教会を導き用いて神のことばを前進させる神の不思議なみわざでした。そうやって神は教会の内外に、ご自身が、主イエス・キリストが生きて働いておられることを証しなさいました。

そんなイエスの証人として、ルカは改めてステパノのことを記します。〈さて、ステパノは恵みと力に満ち、人々の間で大いなる不思議としるしを行っていた。〉(8)

先に学んだように、〈毎日の配給〉、〈食卓のことに仕える〉奉仕者選びの基準が、〈御霊と知恵に満ちた、評判の良い人〉(3)でした。そして〈信仰と聖霊に満ちた人〉として選ばれた七人の最初に名前が挙げられていたのがステパノでした(5)。そしてここ(8節)でも改めて〈恵みと力に満ち〉ていたと書かれています。ステパノがそれほどの人だったのは、もちろん神のあわれみの故であり、まさにイエスが〈恵み〉を彼に施して下さっていたからにはほかなりません。〈力〉ももちろん神からのものでした。それは「聖霊があなたがたの上に臨むとき、あなたがたは力を受けます。そして…わたしの証人となります。」とイエスが使徒たちに言われた(1:8)あの力と全く同じ力です。その力はやはり使徒たち、そして他の弟子たちと同じように、熱心に神に祈り求めて与えられたに違いありません。

彼が〈人々の間で大いなる不思議としるしを行っていた〉とありますが、彼が行った〈不思議としるし〉がどんなことだったかは書かれていません。〈人々の間で〉という〈人々〉とは、特に毎日の配給、食卓のことに仕えるときに出会い、仕えた人々のことだと思われます。使徒たちが担った〈祈りとみことばの奉仕〉も、ステパノが担った毎日の配給、食卓のことの奉仕も、どちらの奉仕も主イエス・キリストの証人としての奉仕でした。その意味でどちらもイエスの証人としての教会として欠くことのできない、大事な奉仕だったのです。だからこそ使徒たちもステパノ(たち)もそれぞれの奉仕に必要な聖霊の〈恵みと力〉を熱心に必至に日々、そのときそのとき祈り求めたに違いありません。そして神は祈りに応えて〈御霊と知恵〉〈信仰と聖霊〉〈恵みと力〉を与えて下さったのです。「求めなさい。そうすれば与えられます。…天の父はご自分に求める者たちに聖霊を与えてく

だします。」(ルカ 11:9-13)とのイエスの約束のとおりでした。

ステパノは〈やもめたち〉への〈毎日の配給〉〈食卓のことに仕える〉奉仕に日々忙しく駆け回っていたことでしょう。それはただ、物を持って行って与えるだけに終始するものではなかったでしょう。(先にも触れたように)以前とはまた違った状況の中で〈苦情〉が出て、それらを延々と聞かされるということもあったかもしれません。ステパノが行った〈大いなる不思議としるし〉とは、そんなときになされたのでしょうか。これも先に触れたように、具体的にどんなわざであったかはわかりません。しかしそこには〈神のことば〉イエスについての証し、〈イエスがキリストであると教え、宣べ伝える〉ことがあったことは間違いのないでしょう。

さて、そもそもステパノたち七人が選ばれ、任命された発端は、〈ギリシア語を使うユダヤ人〉たちからの苦情でした。ですからステパノは当然、〈ギリシア語を使うユダヤ人たち〉に大いに仕えたことでしょう。そんな彼が仕えるために遣わされて行ったその先で出会うことになったのが、〈イエスがキリストである〉とは信じていない、いや信じようとしないう〈ギリシア語を使うユダヤ人たち〉だったのでしょうか。それが〈リベルテンと呼ばれる会堂に属する人々、クレネ人、アレクサンドリア人、またキリキアやアジアから来た人々〉(9)でした。紀元前 60 年頃にローマ帝国の将軍ポンペイウスがユダヤを征服したときに捕らえたユダヤ人をローマに連れて行って奴隷にしました。その中で後に解放されて自由人となった人々とその子孫がリベルテンと呼ばれ、彼らはエルサレムに会堂を作り、そこにローマからだけでなく、〈クレネ〉や〈アレクサンドリア(どちらもアフリカの地中海沿岸)〉や〈キリキアやアジア〉(今のトルコ)から来た〈ギリシア語を遣うユダヤ人たち〉も集っていたのです。そういう熱心なユダヤ教徒である人々のほうから〈立ち上がって、ステパノと議論した〉のです。「解放奴隷」としては「リベラル」でしたが、ユダヤ教徒としてはがちがちの保守派、律法主義者たち、「イエスはキリストではない」と主張する人々だったのでしょうか。そしてその中に〈キリキアのタルソで生まれたユダヤ人〉(22:3)サウロがいたことはほとんど間違いのないと思われます。

しかしそんなユダヤ人たちから議論を挑まれたステパノが〈語るときの知恵と御霊に対抗することはできなかつた〉(10)のです。ステパノが何を語ったのかはこれも具体的には書かれていませんが、〈イエスがキリストであると教え、宣べ伝え〉たことは間違いありません。〈知恵〉はもちろん、キリストの〈御霊〉による知恵、神から受けた知恵です。そんな〈知恵と御霊〉に、〈神のことば〉に、人間が本当の意味で〈対抗することは〉できません。反対したり、罵(ののし)ったりすることはできても、それが精々です。

ステパノが〈語るときの知恵と御霊に対抗することはできなかつた〉とあります。議論を挑まれたとき、ステパノは「黙ってじっと耐えた」ではありません。彼は〈語る〉べきことをはっきりと、そして正しく語りました。それは内容としては「イエスがキリストである」ということには違いありません。しかしただそのことを御題目のように繰り返したただけとも思えません。彼は〈いつも、使徒たちの教えを守り、交わりを持ち、パンを裂き、祈りをしていた〉(2:42)はずです。だからこそ〈御霊と知恵に満ち〉〈信仰と聖霊に満ち〉〈恵みと力に満ち〉ていたのです。そして議論を挑まれたときに、イエスがキリストであることを「語るべき語り方で明らかに示すことができるように」(コロサイ 4:2)、「宣べ伝える際、語るべきことを大胆に語れるように」(エペソ 6:20)祈って語ったに違

いありません。〈神のことば〉であり〈神の力、神の知恵であるキリスト〉(I コリント 1:24) イエスによって、イエスの〈御霊〉に守られ、助けられ、導かれて、ステパノはこのとき人を恐れず語り、この後も語り、生き、そして死をも恐れずついに殉教するのです。

主イエス・キリストがステパノになさってくださったように、私たちにも同じあわれみと恵みをもって臨み、働いてくださるように、私たちを〈神のことば〉と〈御霊〉に聞き従い、導かれ、キリストの証人として歩ませてくださるように、切に祈り求めます。